

ケアマネの孤立防止

兵庫県朝来市では、主任ケアマネジャーを軸とした「外部スーパービジョン制度」を約10年前から導入し、地域全体でケアマネジメントを支える体制づくりを進めてきた。生野区地域包括支援センター主任ケアマネジャーの北川慎一氏に話を聞いた。



朝来市生野区
地域包括支援センター
主任ケアマネジャー
北川慎一氏

同市の人口は約3万人。市内には居宅介護支援事業所が約10事業所あり、29名のケアマネジャーが約2340人の要介護・要支援認定者を支援

している(2025年12月1日現在)。市は直営・委託の地域包括支援センターを中心に、管理者や主任ケアマネジャーへの後方支援を行ってきた。

外部スーパービジョン制度の仕組みは、包括主催の「ケアマネジメント支援会議」で、アセスメントの視点や援助者としての構えを学び、その学

事業所横断で人材育成

びを各居宅介護支援事業所になる」と語る。

所の事例検討会でも具現化することを目指すも。経験の浅いケアマネジャーにとっては、他事業所の考え方や主任ケアマネジャーの思考プロセスを直接知ることが、大きな学びになる。単なる「答え」ではなく、「なぜそう考えるのか」を共有できる点が、OJTなどでは補いきれない育成効果を生む。

北川氏は「他事業所の視点をすることで、自分の考えを見直すきっかけになる」と語る。認知症、生活困窮、医療と介護の連携など、地域が直面する多様な課題を具体的事例に基づいて検討することで、ケアマネジャーは実践的な力を磨いてきた。この制度の狙いは、新人・若手ケアマネジャーの育成にとどまらない。主任ケアマネジャー自身も「教えることで学び直す」機会を得て孤立を防ぎ、事業所間の横のつながりが強まっている。